

議員（氏家 法雄）

2番、氏家 法雄、一般質問を始めさせていただきます。

はじめに昨年より続く米価高騰は以前として高止まりを続けており、政府は今春から備蓄米の放出を始めましたが、スーパーに並ぶ5キロ入りの米は4千円を超え、前年のほぼ2倍で推移しています。消費者の家計を直撃する緊急事態は一方で、生産農家からは消費者の米離れや今後の暴落を懸念する声も漏れ聞こえます。

帝国データバンクによると2024年に倒産や休廃業・解散に追い込まれた米作農業生産者の数は42件で2023年の35件を上回り、過去最多を更新したと言います。一刻も早い解決と将来の安定供給、また農業環境の改善を一刻も早く望むものです。

それでは本題に入ろうかと思えます。今回の一般質問では瀬戸内国際芸術祭について2つの角度から問わせて頂こうと思えます。

本年は、3年に一度の「瀬戸内国際芸術祭」が開催されます。すでに春会期を終えましたが、本町では高見島で秋会期の予定となっています。

6月議会では、「瀬戸内国際芸術祭 2025」について、いくつか質問させていただきます。

丸尾町長は本年3月の施政方針の中で瀬戸内国際芸術祭、ほか観光事業について次のように言及しています。すなわち【魅力あふれる観光の振興】ということで、次に魅力あふれる観光の振興であります。新年度は「瀬戸内国際芸術祭 2025」及び「大阪・関西万博」と国際的にも注目されるイベントが開催されるため、国内外からより多くの観光客などが見込まれますので、県や各種団体などの関係機関と連携し、既存の観光コンテンツに加え、広域観光の受入れ態勢の整備・強化などを図ってまいります。また、観光振興団体への支援や観光情報の発信を引き続き実施するとともに従前から行っております「さぬき瀬戸大橋広域観光協議会」や「空の駅かがわ」、「北前船日本遺産推進協議会」等、県内外の関係機関との連携を図り、広域的な取組による本町への来訪者の増加、交流人口等の拡大に努めてまいります。と述べております。

そこで質問です。芸術祭をはじめとする観光振興について「県や各種団体などの関係機関と連携し、既存の観光コンテンツに加え、広域観光の受入れ態勢の整備・強化などを図ってまいります」とありますが、具体的にはどのように進んでいるのでしょうか。

1つ目は「関係機関と連携」の状況や予定について教えてください。

町長（丸尾 幸雄）

氏家議員の県や各種関係機関との連携の状況や予定についてのご質問に答弁をさせていただきます。

昨年度の「さぬき瀬戸大橋広域観光協議会」の事業においては、現在開催中の

「E X P O 2025大阪・関西万博」を見据え、中讃圏域の広域観光への関心度を高めるため、令和7年1月に神奈川県川崎市で開催された「香川県物産展」に出展し、観光PRや多度津産オリーブオイルなどの販売を行い、特産品の宣伝・周知を行いました。また、4月5日、6日の2日間にわたり開催された「ウルトラうどんマラニック」にもサポーターとして参加し、町のPRを行いました。高松空港に設置されている「空の駅かがわ」は、観光名所にもなっている「うどんの出汁が出る蛇口」に加え、来場者の方々に本町や県内各市町の観光パンフレットを手にとったり、各自治体の紹介動画を視聴したりして頂くことが出来る場となっています。

また、北前船日本遺産推進協議会のホームページでは、本町の紹介記事や構成文化財をまとめた北前船データベースが公開されています。今後も各関係機関との連携を深め、多度津町の情報発信を続けてまいります。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

町長、丁寧な説明有難うございます。今日までの取組について、ご説明頂いたんですが、分かる範囲で結構ですので再質問になりますが、今後の連携の予定等ありましたら、ご説明頂ければと思います。

産業課長（植松 肇）

氏家議員の再質問にお答え致します。現状、さぬき瀬戸大橋広域観光協議会及び中讃圏域で行っております観光部門のイベント等については、具体的なものは現状決まっておりません。ただ、インバウンドであったり、国内観光の拡大等が非常に叫ばれております。先ほど答弁にもありました、うどんマラニック等のスポーツイベントも大変人気となっております。こういったものの開催について、出来るだけ広域的な観点で執り行っていきたいと考えております。また、本町独自のやり方としても観光協会等を通じて、何かしらイベントを開催出来ないかということで、検討は進めてまいりたいと思っております。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

次は、既存の観光コンテンツに加え、広域観光の受入れ体制の整備・強化とありますが、その進捗状況について教えて下さい。また、ここでは「既存の観光コンテンツ」と分けられているんですけども、こちらを具体的に示した上でお答え頂ければと思います。

産業課長（植松 肇）

氏家議員の既存の観光コンテンツに加え、広域観光の受入体制の整備・強化の進捗状況についてのご質問に答弁をさせていただきます。

本町におけます観光コンテンツとしては、瀬戸内国際芸術祭の会場となってい

る高見島と県外から多くの観光客が訪れる佐柳島、桜の名所である桃陵公園に四国遍路第77番札所、道隆寺や弘法大師・空海、誕生の地と言われている海岸寺などがあります。また、本町で行われているイベントと致しましては、多度津町観光協会が実施しております「たどつさくらまつり」、「たどつ全国凧あげ大会」、「たどつ港まつり花火大会」が挙げられます。

さくらまつり、凧あげ大会ともに本町において古くから親しまれているイベントであり、本年は4月6日（日）に開催され、両イベントともに多くの来場者で賑わいました。

また、毎年8月の第1土曜日に開催されています「たどつ港まつり花火大会」は、県内でも有数の規模を誇る花火大会で、毎年多くの観客で賑わっており、今年度も開催に向け、多度津商工会議所と共に準備を進めているところであります。

地元ガイドによる、まち歩きツアー「たどつまち歩き」は通年開催されており、いずれのまち歩きコースも多くの参加者を集め、多度津町の魅力を体験して頂いております。

さらに、平成29年度より始まりました「たどつ桜たんページェント」は、多度津町の新たなイベントとして定着しています。こちらは、官民共同組織「まねきねこ課」が主催するイベントで、新たな視点を取り入れた試みとして注目され、毎年多くの来場者が集まり、遠くは関東からも参加者が訪れる人気のイベントとなりました。

これら既存の観光コンテンツを先ほどのご質問にありました広域観光組織での取組等でPRを行い、また、県や各市町の観光協会などの関連団体との連携を深め、更なる来訪者の増加に繋がるよう努めてまいります。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

再質問をしたいところもあるんですけども先を急ぎたいので、一つだけお願いが出来ればと思うんですけど、百十四銀行の百十四経済研究所の「香川の姿2024年版」が出来たんですけども、例えば観光というのが冒頭に出てきますが、やはり未だ多度津町というのは、観光の「か」の字も出てきてないのが現状っていうところを認識した上で、既存のコンテンツはあるけれどもPRしたら人が来るのかっていう問題で今、我々は上に上がれてないっていうところがありますので、物があるよって来て下さいって言っても誰も来ないのが現状だと思いますので、そこでどう呼び込んでいくかっていうが、この後に続くんですけども、取組を重ねて頂きたいなと思います。そこで今、観光というところでお話が言及しましたので、先に進もうかと思いますが、今、こういう状況で、広域的な中で多度津町をアピールしていくってことなんですけどそこに工

夫をしながらということで、コロナ禍の先の2022年の芸術祭では、経済効果は103億円と推計されています。既存の観光コンテンツに加え、広域観光の受入れ体制の整備強化などを図ることで、本町に対する経済効果も期待出来るんですが、そこで質問です。

芸術祭、秋会期になりますが、こちらの客をターゲットにした本町独自の経済効果・呼び込みの取組はあるのでしょうか。お願いします。

産業課長（植松 肇）

氏家議員の芸術祭をターゲットにした本町独自の取組についてのご質問に答弁をさせていただきます。

前回2022年の瀬戸内国際芸術祭の開催時には、内陸部開催として本町筋にある建物を利用して3つの作品展示が行われるとともに町指定文化財である合田邸の公開を行いました。

今回の瀬戸内国際芸術祭では、陸地部側での作品展開については現時点で未定とのことですが、芸術祭は本町に多くの方が訪れる良い機会であることから、陸地部側で作品展開がない場合においても多度津港からJR多度津駅までの道程で、例えば本町筋に立ち寄り、合田邸の公開や日本遺産に指定されている北前船関連資料の展示をご覧頂くなど来訪者の方に本町の歴史や魅力を肌で感じて頂けるような取組について庁内で検討してまいりたいと考えています。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

再質問をさせて頂こうかと思うんですが、何らかの芸術祭に訪れる観客を対象に手を打っていくことを庁内で検討されるということなんですが、もう9月まで3箇月しかない状況です。例えば、この北前船なんかですと資料館を管理している指定管理者との連携も必要になってくると思われるんですが、例えば今後、ざっくりになるかと思うんですけれども、どういうスケジュールで、その対策っていうものをオープンにされるのか。道筋をお示し下さい。

産業課長（植松 肇）

氏家議員の再質問に答弁をさせていただきます。

現状では現在特別こういったものをしたいということで構想が固まっている訳ではございません。ただ、氏家議員がおっしゃって頂いたとおり、資料館等に非常に多くの北前船の資料が残されております。あるいは本通筋においてもたくさん資料がございます。本町筋を愛する会の方々、あるいはまち歩き団体の方と、こういった方々と連携しながら観光客の方に多度津を知ってもらう機会というのを創生したいという風には考えております。非常に時間がないということは、ご指摘のとおりであります。時間がない中ですが、皆様方と協力しながら、少しでも観光客の方に足を運んで頂けるようなものを作りたいと思っ

ておりますので、しばらくお待ち頂ければと思っております。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

是非、柔軟に迅速に取り組んで頂きたいんですが、先に町長がこれまでの取組をおっしゃってたんですけれども、例えば、このウルトラうどんマラニック、これもちよっと拝見させて頂いたんですが、非常に簡単に出来る割には面白い試みだなっていう風な印象を受けました。例えば、既存の観光コンテンツを色々並べて頂きました。西は海岸寺から東は道隆寺、その中央に本町筋があり、色んなコンテンツがあるということなんですが、ウルトラ多度津うどんマラニックのようなもの、簡易なものでも出来ると思うんですね。昨日も重伝建の問題で、重伝建がその地域だけの問題のようになって。町長はそうじゃないんだと、多度津全体に波及していくコンテンツなんだっていうお話もされていまして、そういう既存の観光コンテンツを周遊出来る、また、何らかの回るとスタンプがあるとか、そういう簡単なことからでもいいと思いますので、何もやらないで、また3年流れていかないようにして欲しいなと思います。ぜひ、取り組んで頂ければと思います。

続けますが、2022年の芸術祭では、高見島だけでなく陸地部においても作品展示が初めて展開されました。「瀬戸内国際芸術祭2025取組方針（改訂版）」で示された高見島の「今後の展開方針・展示内容」として「急傾斜に立ち並ぶ家々を活用し、既存作品と新規作品を織り交ぜながら島を紹介していく。また、陸地部では、古くから金比羅参詣や北前船の寄港地として多くの人で賑わい、四国鉄道発祥の地として栄えた多度津駅から港までのエリアを2022年同様に作品展開に活用する」とあります。これは具体的な予定は、まだ示されておりませんが、展示のあるなしに関わらず、高見島へ鑑賞に訪れる方々は多度津駅から多度津港へ進むようになるかと思います。これまでの芸術祭での対応を見ますと案内不足や対応不足の遅れが否めません。

2022 年の実行委員会の『総括報告』では、住民意見交換会（高見島、多度津町本通）の課題として次のような声が寄せられています。

陸地部への来場者の周遊を促す方法を検討する必要がある。次回に向けて多度津の町を歩いてもらい、産業の活性化に繋げるにはどうすればよいのか考えなければならない。

この課題が3年間そのままになって、待ったなしの3箇月になっている状況です。こうした声が寄せられていますけれども、今回は、こうした反省は生かされているのか、どのような対策を講じているのか教えて下さい。

政策課長（吉田 拓也）

氏家議員の陸地部への来場者の周遊を促す対策についてのご質問に答弁をさ

せて頂きます。

本町は2013年より瀬戸内国際芸祭に参加しており、高見島が作品会場となっていました。2022年には初めて陸地部側の本通筋で多度津街中プロジェクトとして作品展開が行われました。

しかしながら、島しょ部と比べて陸地部の作品は来場者数が伸び悩んだこともあり、2022年会期後の地元住民との意見交換会の中でも陸地部への周遊を促すような方法を検討する必要があるのではないかと意見があったことを認識しています。

この意見が出た要因の一つに会期中のＪＲ多度津駅と多度津港を結ぶシャトルバスが考えられます。ＪＲを利用して来られた方は、無料のシャトルバスを利用することで駅から港までスムーズにアクセスすることができ、来場者からも大変好評でした。

一方で、陸地部で作品展開された本通筋へは徒歩で向かう必要があったため、ＪＲでお越しの方や高見島から帰ってきた来場者に対してスタッフが声掛け等により本通筋への誘導を行いました。それにより、一定の成果はあったものの選択出来る移動手段が徒歩しかなく、十分な周遊を促すことが出来なかったと考えています。

今会期は、現時点では陸地部の作品展開は県実行委員会より示されていないこともあり、まずは瀬戸内国際芸術祭を目的とした来場者にフェリーに乗り遅れることなく無事に高見島に渡って頂くことが最重要であると考え、従来と同様に無料シャトルバスの運行とともにＪＲ多度津駅から多度津港間の徒歩推奨ルートに来場者が迷わず進行出来るように看板や幟を複数設置する予定です。また、その他として今後は広域的に新たな移動手段の取組が出来ないか近隣自治体や県実行委員会などの関係機関とも協議を行っていきたいと考えています。

いずれにしても町外より多数の来場者が訪れる貴重な機会ですので、多度津港と高見港に設置される案内所にチラシやパンフレットを設置し、来場者に積極的に配布することで周遊を促すとともに今後作成を予定している島マップについては、高見島の情報だけではなく、陸地部側の魅力的な場所や宿泊施設、飲食店などを掲載することで高見島はもちろんのこと本町全体の魅力についても発信し、出来るだけ多くの方の本町への滞在や再訪に繋げていきたいと考えています。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

確かに2022年の会期では、例えば地図とか案内マップのようなものの類いの準備もかなりずれ込んで遅れて配布になったり、捨てた状況が見られましたので、先ほどの産業課とも時間がないという中で、一生懸命こちらに関しても漏れなくやって欲しいと思う一方で時期的なタイミングを考えますと10月は移

動交通の実証実験も始まる。国勢調査も始まるっていう中で会期が重なるっていうことを考えますと、その担当課がきちんと自覚を持ってそれぞれ出来る取組ということに執念を持ってやって頂かないと全部が中途半端になってしまうのかなっていう印象が拭えません。ですので、責任感と役割分担というところをきちんと自覚しながら、この瀬戸内国際芸術祭を迎えるようにして欲しいと思います。また町長がいつもおっしゃる周遊性というところ、町内の。を考えてみるとこのシャトルバスにしても朝一本、町内をグルッと回ってから港に行くっていうのもあってもいいのかなっていう印象もありますので。例えば、それだとそんなに予算規模が一気に膨れるということもないと思いますので、そういう工夫もされるとよろしいのかと思います。先に開幕した春会期では前回が228,133名で、今回は320,668名と大幅に増加しており、経済効果もさらなる上乘せが期待出来ます。是非、9月の補正予算で何らかの対策を講じて頂きたいとお願い申し上げます。

それでは、引き続き瀬戸内国際芸術祭を取り上げようと思いますが、教育という観点からこの芸術祭を考えてみようと思います。

瀬戸内国際芸術祭は、次のような理念を掲げています。

すなわち、『海の復権』をテーマに近代化の中で、ともすれば忘れられてきた島を舞台に現代アートの力を借りて島のお年寄りの笑顔を願い、瀬戸内海が地球上の全ての地域の『希望の海』となることを目指す壮大な地域再生の取組です。

アートを通じて地域の内外の方々が地域の魅力を再認識することで地域活性化へと繋ぎたいとの思いが込められています。2022 年の総括報告に掲載されたアンケートの中で芸術祭を通じて自分が住む地域の見方が「大いに変わった」、「少し変わった」と回答した住民が 35.2%であったとそれを裏付けています。この意味で、先に観光とか経済っていうところに注目しましたが、教育とか地域というところに対しても芸術祭との関わりの中で、地域が元気になっていくヒントがあるのではないかと思います。

今回の開催では「瀬戸内国際芸術祭 2025 学校連携事業」として香川県では「アーティスト×中学生交流プログラム」を新たに実施しています。

その目的は「中学生が自分たちの暮らしている地域の魅力を学ぶとともに自ら考えて行動することで豊かな心や想像力を育み、人間性を磨き高める一助」を目指しとあります。今年度は5校が選ばれ、アーティストとのワークショップが予定されています。

残念ながら多度津中学校は選ばれておりませんが、芸術祭をきっかけに導線とすることで多度津町の「宝」である児童生徒が多度津町の魅力を発見し、アートを通じて「自ら考えて行動する」ことが出来るようになれば、多度津町の持

続可能な発展に寄与出来るのではないかと考えます。

そこで質問です。瀬戸内国際芸術祭は今回で 6 回目となりますが、芸術祭と本町小・中学校の連携事業は、これまでにあったのでしょうか。

政策課長（吉田 拓也）

氏家議員の芸術祭と本町小・中学校の連携事業のこれまでのご質問に答弁をさせていただきます。

瀬戸内国際芸術祭の学校連携事業については2018年より開始されており、2022年までは高等学校が学校連携事業の対象となっていました。今回は、県実行委員会の方針として、これまで学校連携事業を行っていなかった中学校に重点が置かれたため「アーティスト×中学生交流プログラム」が実施されることとなり、高等学校の連携事業は現時点では香川県立高松工芸高等学校のみであると聞いています。

なお、小・中学校ではありませんが、これまでの高見島に関連した学校連携事業ですと2019年には、香川県立丸亀高等学校により事前調査を踏まえた高見島アートツアーが行われました。2022年には、香川県立多度津高等学校により高見島研修センターにおける写真展示やテーブルやベンチの寄贈が行われました。

また、学校連携事業ではありませんが、2013年には「畏敬・よみがえる失われたかたち」という作品がありましたが、これは当時の本町の全幼稚園児と小・中学生により、約3,000本の黄色い旗に青いインクで手形やメッセージが描かれたもので、高見島の屋外に展示されました。

現時点で町内の小・中学校や高等学校が学校連携事業の対象とはなっておりませんが、引き続き県実行委員会に対して町内の公立学校との連携について強く働きかけを行っていきます。

学校連携事業の有無に関わらず、子どもたちがアートを通じて地域の魅力を学ぶことは重要であると考えますので、今後も県実行委員会と情報共有を密に行いながら、各学校に対しても適宜情報提供を行うとともに必要に応じて町独自の取組としての学校連携について、関係部署とも連携して検討を行っていきます。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

まだ、どういう余地が残されているのかというところが、微妙なところもあるかと思うんですが、是非、実行委員会、また、香川県の方には多度津の児童・生徒が関われるような何かないのかということ強く要望を上げていって欲しいと思います。そのことで、住んでいる町のことを知れば知るほど愛着も湧いていくようになれば、定住意識も促進されていくことだと思いますので、ここは、しっかり、つき上げていって欲しいなと思います。今、芸術祭実行委

員会とのやりとりの中で、これまでのこと、今後のことについて説明を伺ったんですが、今度は学校教育とか教育現場の方でどうなのかっていうことを伺おうかと思います。

そこで次の質問になりますが、小・中学校の児童・生徒を対象にした瀬戸内国際芸術祭に係る本年度の取組予定というものは、ありますでしょうか。

教育長（三木 信行）

氏家議員の小・中学校の児童・生徒を対象にした本年度の取組予定についてのご質問に答弁をさせていただきます。

本年度、瀬戸内国際芸術祭の芸術家が講師となったワークショップは予定されていません。

過去に芸術家が講師として実施したワークショップ等は芸術家の速水 史朗 先生による特別授業が行われたり、文化庁の巡回公演における「手話狂言」に向けたワークショップや「よんでんアンサンブル」、「アンサンブル神戸」による演奏会やワークショップ等が行われています。

これらのイベントは、文化庁や主催団体から各小・中学校へ教育委員会を通じて照会があったり、直接、照会が行われたりしています。各小・中学校においては、年度途中であっても照会があったイベントの中から希望するイベントがある場合に申込みを行い、内示の後、内容やスケジュールを協議し、実施しています。

よって、今後、瀬戸内国際芸術祭の芸術家の方からワークショップ等の実施希望があった場合は、各小・中学校へ照会させていただきます。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

芸術家とのワークショップ等に関して、今後余地があれば、是非、触れることの出来る機会を作って頂ければと思います。この瀬戸内国際芸術祭、アートということなんですけれども、もう一つ重要な観点がありまして、瀬戸内海の島ということなんです。本町では高見島が会場として選ばれるということなんです。多度津の住民の方でも、なかなか今、島に行ったことのない人の方が多い時代です。ですので、何らかの形でワークショップに関しては、あれば是非やって頂きたいんですが、多度津の児童・生徒が高見島など何らかの関わりが持てるような機会というものは、作ることというのは、可能でしょうか。再質問させていただきます。

教育総務課長（池田 友亮）

氏家議員の再質問に答弁をさせていただきます。

議員ご提案の高見島、また佐柳島等々に児童・生徒が行くという趣旨は、理解致します。ただ、児童・生徒を移動させるというケースの場合、児童・生徒の

安全、また移動手段や費用、事故の対応であったり保険であったり、引率の有無などを事前に考える必要があると思います。具体的な話というのが進んでいけば、学校の方とも相談させて頂ながら考えていきたいと思います。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

確かに現実的に差し迫った3箇月後、中学校の学生生徒さん全員を高見島に招くというのは、かなり不可能に近いところもあるだろうなということは、拝察出来るんですけども学校教育という縛りもあります。そういうところで考えると再々質問になるんですけども、少し教育ということの枠を広げてみて、生涯学習というところから、学校教育という現場を離れて、生涯教育というところで高見島、また、アートのようなものに町内の方々が触れ合う機会を作ることは出来るのかどうか、それを再々質問させていただきます。

教育長（三木 信行）

氏家議員の再々質問に答弁をさせていただきます。

生涯教育というと生涯学習課長とも今後、相談していくことになろうかと思いますが、一般的な大人という意味だろうと思うんですけど、これについては先ほどの安全面とか費用の面とかありますので、十分検討していかないかところもあると思いますし、価値のあるところだろうと思います。児童・生徒、特に生徒につきましては、例えば、これまでですとボランティア団体の方から色々ご紹介頂いて中学生が高見島へ渡って案内をしたり、それから茶粥の接待をしたりということはありません。今、具体的には前回はどうだったかという資料がないんですが、2019年に私は多度津町の現場にいましたので、そういうボランティア団体の方からそういう照会がありまして、当然、保険もあって安全であろうということで私自身も生徒と一緒にいったこともありますし、数回にわたって、この会期の土曜日あたりは色んな活動に参加をしたということもあります。そういったことで繋がりはありますし、興味関心のある子どももいると思いますので、そういったところを模索していけるのかなと思っています。その中で、ふるさと高見島とか瀬戸内海とか、そういうものに興味関心を持ったり、そしてその子たちがまた、その芸術祭において、大人になってボランティアとして活躍したり、そういうことに繋がっていくのかなと。そんなことを感じたりしております。やや具体的ではありませんが、以上、答弁とさせていただきます。

町長（丸尾 幸雄）

今の氏家議員の質問とか、そういう中で、ちょっと思い出したんですけども、そのワークショップのことなんですけども、最初に高見島で瀬戸内国際芸術祭を行った時に黄色いハンカチプロジェクトというのがありました。それは全小

学校だったと思うんですけども、アーティストが、その小学校の子どもたちにハンカチに色んなものを書いてもらう。再度になって申し訳ないんですが、その時に黄色いハンカチプロジェクトのようなものを子どもたちに、もう一度、やってもらうということも氏家議員との話の中で考えていたところでもありますので、そういうことも考えて、これから実現出来ればいいなと思っておりますので、どうかよろしくお願い致します。

副町長（岡部 登）

氏家議員の再質問に答弁をさせていただきます。

先ほど町長が申し上げたような、そういうイベントがあった時に私は、産業課長で担当しておりましたので、確かに自分が作ったやつを見に来る小学生は親御さんを含めて多かったような気がします。それ以外にワークショップで言いますと、名前は忘れたんですが、色んな砂浜で出来たものを黒く塗るというのがあったような気がしますし、それから、古民家の香露軒の中でインドネシアかどこかの楽団が来て、それを皆さんでワークショップみたいな形でやるのもありましたし、色々そういうのは、小さいやつがポロポロ計画はされるようになると思います。それから先ほど申し上げましたバスの運行なんですけれども、そのことについても 2,013 のときに検討したのが、1 番に、ここにこられる人が望んでいるのは、船に遅れないように行きたい。駅に降りて船の時間までにきちんと行きたい。それから船から帰ってきたら、電車に遅れないように行きたい。電車は 1 時間に 1 本ぐらいしかありませんから、そういうことを 1 番望んでいらっしゃる。朝とか夕方にバスを町内を走らせることも検討したんですが、朝だとお店が開いてないんですね。9 時の船ですので、その前の 8 時台ですから、開いているところが少ないということで、その辺のことについても検討はさせていただきましたけれども、なかなか現実には難しいところが多々あるということもありました。ワークショップについては、これからどんどん色んなものが出てくると思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。以上、答弁とさせていただきます。

議員（氏家 法雄）

今、町長・副町長から提案と言いますか過去の事例の紹介があったかと思うんですが、吉田課長の方からも同様の趣旨の答弁を頂いておりますが、例えば、ワークショップになっちゃうと、また、ある意味でいうと学校の方には時間的な負担がかかるっていうところがあれば、例えば、その黄色いハンカチのようなものをハンカチでやるのか絵手紙でやるのか、手を押すのかとか、そのやり方というのはこれから、例えば、月 1 回やってる校長会・園長会のようなところで、内容というかやり方は検討して頂いたらいいと思うんですが、1 番簡単なものを夏休みの宿題にしちゃえば、絵を描いてくるみたいな。それを例えば、

港に会期中は展示をしてあげる。それが利用者のおもてなしの地元の中学生、小学生・幼稚園児のアートという形で立てれば、必然的に描いた子どもと親は見に来るっておっしゃっていました。だとすれば、そこから高見島への道というものも開かれていくんじゃないかならうかと思いますので、予算的なコストも非常に抑えられ、かつ、町内の児童・生徒が地域の魅力を発見するきっかけにもなる。芸術祭に触れてしまう可能性も出てくることにならうかと思いますので、こちらの方は、今、町長さんの方からもうこういうのがありましたっていう提案がありましたので、その 2025 年版っていうものをちょっと真剣に急いで考えて頂けると楽しいのかなと思います。

なぜ地域の魅力を再発見することが大事なのかっていうことで、作家の小倉美恵子さんというのが、諏訪式という本を書いています。諏訪というのは長野県の諏訪地方のことなんですけど、この長野県の諏訪地域というのは、ご存じのとおりセイコーエプソンを初めとする電子機器とか光学機器の日本を代表するイノベーションの震源地であり続けている地域です。その小倉さんが住む長野県の諏訪地域を歩きながら、なぜそうなったのかということを探っていくんですけれども、その中で古来から外来者と渡り合い、その力を引き寄せて自らの土地を活かしてきた。あるいは上京してもなお、諏訪の風土をその身に宿す諏訪人の姿がそこにあるからだとその要因を見定めています。

色んな人と触れる機会の多くなるのが瀬戸内国際芸術祭ではなかろうかと思います。開催方針の中では、交流・学習・共同・観光、感幸というのを感じるに幸ということですが、観光と感幸ということで、例えば来園者に対して土地の力を伝え元気を与えるとともに地域住民の誇りを呼び戻すとあります。だとすれば、例えば最初に取り上げたように経済的な効果とか観光力の強化というところも期待されてしかるべきで活用していくことが大切なんですけれども、地域の住民たちにとっても多度津で頑張っていこうというモチベーションだとか、地域に関わっていこうというものを高めていく一つのチャンスになるんじゃないかと思います。古来から外来者と渡り合い、その力を引き寄せて自らの土地を活かしてきた諏訪人の秘訣を芸術祭は私たちに提供しているのではないかと思います。幸い、本町では芸術祭の開催は最終盤の秋会期となります。3 年先に課題を先送りするのではなく、今から急いで対応することで地域の経済活動も児童・生徒への教育も、また、その車輪の両輪によって地域全体の活性化についてもトータルに対応出来るのではないかと思います。

これまで色んなものが課題にはなってるんですけど、例えば昨日も合田邸・重伝建の問題も出てきたんですが、多度津町の今、本当に最大の問題というのは、点と点があるだけで面になってないってことなんです。なかなか時間がないんですけれども、それを今回というのは、面に切り替えていくチャンスだと思

います。

先ほどの黄色いハンカチのような取組を続けていくこと、こういうことからでも出来ることだと思いますので、ここはひとつ知恵を絞って、急ぎ課題に対して対応して欲しいとお願いしまして2番、氏家 法雄の一般質問を終わります。有難うございました。